

## Nicholas Nickleby における家族・階級

榎 本 洋

### I

Dickens の第 3 作 *Nicholas Nickleby* は 1837 年 4 月から 39 年 10 月にかけて Chapman and Hall 社から、20 回の月刊分冊で発売された。当然、連載物の性質上、物語の構成は弛緩を極め必ずしも読みやしくない。便宜上作品を 4 つの部分に分けると次の様になる。Squeers の Dotheboys Hall でのでき事と Nicholas の London 出発・帰還など、概ねピカレスク風の遍歴譚で特徴づけられる第 1 章から 23 章まで。以下 Nicholas と Crummles 一家の出会いと別離を扱う 24 章から 36 章まで。Cheeryble 兄弟との出会いを扱った 37 章から 45 章まで。そして残りは、Bray 嬢の救出と Nicholas, Kate, Miss La Creevy らの結婚, Ralph の自殺, Dotheboys Hall の崩壊といったメロドラマ的な筋立が主となる。しかしこのような分類は多少こじつけの感があり、*Nicholas* に一貫した主題を見つけるには余り役に立たない。それも執筆当初 Dickens が *Pickwick* を念頭においたせいか、<sup>1</sup> 或いは *Oliver Twist* との二重執筆が災いしてか、この小説からは関連のない事件の羅列といった雑然とした印象を禁じ得ない。そのためか作品の評判は余り芳しくなく、Gissing はこれを Dickens の最も不満足な作品、Smollett ら 18 世紀小説とメロドラマの不細工な混合物アマルガムと評している。<sup>2</sup> 更に、Bernard Bergonzi に至っては *Nicholas* の Dickens の作品に占める「不安定な位置」を指摘し、「後期の Dickens に期待できる様な特質がない」とまるで歯牙にかけない。<sup>3</sup>

このような *Nicholas* 評価のいわば常套手段として、作品の演劇的な側面を強調して、そこに *Nicholas* の意義を見る傾向がある。Gissing は作品の舞台

性と作者の演劇との密接な関わりについて、Bergonzi も作品の theatricality が断片的な構成に持つ意義をそれぞれ強調する。<sup>4</sup> 同様に、Michael Slater は *Nicholas* の theatricality と登場人物の role-making に小説の有機的エレメントを、<sup>5</sup> Sylvere Monod も *Nicholas* がテーマ、テクニクにおいて theatrical だと評してはばからない。<sup>6</sup> 確かに本文においても、旅役者 Crummles 一家による興行、Ralph ら悪漢らの人物造型、Mrs. Nickleby と気のふれた男との恋愛遊戯などに「劇場の修辞法・脚本のト書きを思わせるような情況描写」<sup>7</sup> がしばしば見られる。従来のごうした *Nicholas* 批評がなぜ執拗に演劇的側面にこだわるかは、Dickens の生来の演劇好きが高じて発足した劇団活動や、当時の悲劇俳優 William Charles Macready との親交にも原因が求められる。<sup>8</sup> こうして見る限り、本書の演劇的側面を強調するのは必ずしも不自然ではない。しかし本来多様な Dickens の世界を一面的な見方で切り捨て、*Nicholas* をそのように見るのは、本書を来たるべき Dickens の演劇活動の前ぶれとしか見ないことになりはしないか。実は演劇性と言っても具体的にどのようなテーマとかかかわっているかが最も大切であろう。

ここでもう一度 *Nicholas* の分冊出版の表題に注意したい。“The Life and Adventures of Nicholas Nickleby” という題に、“Containing A Faithful Account of the Fortunes, Misfortunes, Uprisings, Downfallings, and the Complete Career of the Nickleby Family” という18世紀風のものものしい副題がついている。Monod はこの副題について言及し、当初の長々しい題が *Nicholas* の「生涯」はもちろんのこと、況や「ニッケルビー家の完璧な経歴」に至っては全く触れられていないため1840年版を最後に用いられなくなったという。どうも靈感にまかせて野放図に書きまくる Dickens が、最初から題材に限定されぬようやや大きめの題を一時しのぎの彌縫策として選んだ、というのが実状らしい。<sup>9</sup> しかしここで注意したいのは、たとえ部分的に小説の内容と一致せずとも、人生の有為転変を暗示した言葉 (Fortunes,

Misfortunes, Uprisings, Down fallings) の背後にやはり Dickens の作為が読みとれぬかという事だ。1839, 1848年の版の「序文」の中で, Dickens は教育の悲惨な現状を垣間見て筆をとったと述べているが, 興味深い事に教育現場での幼児虐待を少年の頃から耳にしていたと言う。John. K. Saunders は, *Nicholas* の根底には「怠惰な親」(the negligent parent) の問題が一貫して存在すると述べ,<sup>10</sup> 例として Mrs. Nickleby, 又 Squeers 一家の Dotheboys Hall があげられている。かいつまんで言えば, 全体を統べる象徴とかがなくても, この断片的な小説には「怠惰な親」の問題を以後の Dickens の作品に先がけて扱っているというのが Saunders の主張であろう。そこで筆者は Saunders の考えを拡大し, この小説にある程度通底しているテーマとして先の installment の題を今一度思い出して家族・階級の問題をとりあげ考察していこうと思う。

## II

まず「家族」の問題を追究するに当り, 等閑視できないのは Squeers 一家の Dotheboys Hall の存在であろう。Dotheboys 批判に, *Oliver Twist* の貧民院批判同様, Dickens の義憤があることは39・40年の序文を見ればわかる。ここで注意したいのは, Yorkshire の学校の幼児虐待を幼い頃から聞いていたので, それを確認しにわざわざ現地調査へ赴いたという Dickens の言葉である。つまり, この Dotheboys Hall は, Dickens の幼年時代の経験である靴みがき工場がある程度反映しているという事だ。本文では次の様になっている。

Pale and haggard faces, lank and bony figures, children with the countenances of old men, deformities with irons upon their limbs, boys of stunted growth, and others whose long meager legs would hardly bear their stooping bodies, all crowded on the view together;

there were the bleared eye, the hare-lip, the crooked foot, and every ugliness or distortion that told of unnatural aversion conceived by parents for their offspring, or of young lives which, from the earliest dawn of infancy, had been one horrible endurance of cruelty and neglect. There were little faces which should have been handsome, darkened with the scowl of sullen, dogged suffering; there was childhood with the light of its eye quenched, its beauty gone, and its helplessness alone remaining; there were vicious-faced boys, brooding, with leaden eyes, like malefactors in a jail, . . . (p. 88)

事実、Yorkshire へ送りこんだ Ralph を批難する Nicholas (pp. 250–251), Nicholas が Smike を連れ London を去る時、Nicholas の胸中を去来する家族への思い (p. 255) など、主人公の Yorkshire 体験に Dickens 自身のそれが反映されている事がわかる。しかし、Dotheboys の本当の恐ろしさは、校長の Squeers が自ら生徒達の親代りを主張することにある。Snawley が連れてきた子供たちに向かって Squeers は、“You are leaving your friends, but you will have a father in me, my dear, and a mother in Mrs. Squeers.” (p. 32) と言って慰める。Squeers のこうした「親代り」が Dickens の諷刺の対象とならぬわけがなく、38章で Smike を London で捕縛した時の Squeers の得意絶頂の長広舌は滑稽ですらある (p. 499)。Squeers の専制的な家族主義は、丁度 Fagin の家庭的な振舞いを思わせて興味深いが、重要なのはこのエピソードが単に Dickens の幼年時代の焼き写しのみならず、専制的な家父長が君臨する当時の家庭への批判が込められていることだ。その点 Bergonzi も Dotheboys Hall の機能を “indictment of the failure of parental responsibility” と述べている。<sup>11</sup> だから Squeers の主張するうわべだけの家族主義とは全く正反対のサディスティックな暴力性に支配されているのが Dotheboys Hall の実態といえる。生徒達は奴隷の様に見下され (p.

99), *The Old Curiosity Shop* の Quilp さながらに杖で武装した Squeers に威嚇され、敵対視される (p. 87). 特に Smike に対しては、Squeers の態度は一変して暴力的な快感となる (p. 152). London の路上で捕えた Smike を馬車にたたき込んだ Squeers は、“I never thrashed a boy in a hackney-coach before” とはしゃぎまわり、更に “There’s inconveniency in it, but the novelty gives it a sort of relish, too!” (pp. 498–499) と付け加える。同様の事は小規模であるが、これと一見対照的な Crummles 一家にも見られる。つまり、その陽気な旅役者の一行ですら娘のために苛酷な “system of training” が厳然として存在しているため (p. 230), Dotheboys Hall との「不幸な類似」<sup>15</sup> が図らずしも成り立つ。Dickens が後に扱う *Dombey* や *Murdstone* 一家の萌芽——彼等の家族に見られる福音主義的要素は希薄にしろ——がすでにここにある。

Squeers が暴君的な親なら、その対極の精神的・物質的援助を全て子供に頼るだけのない親もここでは「家族」の問題として欠かせない。このような子供に頼るだけのない親はすでに *Pickwick Papers* の Tonny Weller と Sam Weller などの関係にも見られるが、家族の中で占める比重は Mrs. Nickleby には及ばない。

To do Mrs. Nickleby justice, her attachment to her children would have prevented her seriously contemplating a second marriage, even if she could have so far conquered her recollections of her late husband as to have any strong inclinations that way. But, although there was no evil and little real selfishness in Mrs. Nickleby’s heart, she had a weak head and a vain one; . . . (p. 484)

引用からもわかる様に、Mrs. Nickleby の子供への愛情は自愛 (self-regard) の延長であり、“family greatness” (p. 220) の実現をいつも Nicholas, Kate に期待しているのが彼女の心理構造である。結婚を手段にして過去の栄華を

取りもどそうとする Mrs. Nickleby は、Kate が Mrs. Witterly のあとがまになることや (p. 269), Kate に好色な Sir Mulberry Hawk との結婚を、彼女が嫌っているのに少しも気づかず、しきりに勧める (p. 358). ところがこの自己中心的な態度は実の子以外になるとさらに露骨になる。Snawley の許へ Smike を返すかでもめている時、明らかに Snawley の肩を持ったのは Mrs. Nickleby である。Smike をはや “young Mr. Snawley” と呼び、揚句のはては Snawley に食費・宿泊費など “息子” の費用を要求しようとする (p. 593). 又、Maderine Bray 嬢を匿うことにも不満をもらし、安全のためならフリート監獄に押し込めた方がよいと言う (p. 721). だから Smike を家族に紹介する時、母親の “peculiarities” (p. 442) を知っている Nicholas は、あらかじめ彼女に “You are always kind-hearted, and anxious to help the oppressed, my dear mother” (p.444) とくぎをさすのを忘れなかった。Mrs. Nickleby の面影に Dickens の実母 Elizabeth があることは Slater らの指摘するところであるが、<sup>12</sup> もう一人代表的な「自堕落な親」として Walter Bray がいる。借金の肩代りに娘を守銭奴 Arthur Gride に売りとばした Bray の振舞いが、殆んど日常化していたことは Ralph の言葉からもうかがえる。

“I tell you [Bray] what, sir; there are a hundred fathers, within a circuit if five miles from his place; well off; good, rich, substantial men; who would gladly give their daughters, and their own ears with them, to that very man yonder, ape and mummy as he looks.” (p. 714)

こうした「自堕落な親」、自分のためには子の犠牲もいとわぬ親は以後 Dickens の作品の中にも言及されるが、これと同時にこの親と子の関係が以後ヴィクトリア朝文学の文学的トポスとして広く用いられるようになる。<sup>13</sup>

こうした親を中心とした「家族」の問題には、Dickens が追求してやまぬ結婚の問題が絡んでくる。Mrs. Nickleby の行状や “The Baron of Grogz-

wig” (ch. 6) の物語にも、結婚が多かれ少かれ関係してくる。しかし、小説全体を見渡した時この小説の主題が結婚にある事は、Ralph が Snawley と Smike の嘘の親子対面を演出する場面においてははっきりする。Smike が Nicholas の家に匿まわれているのを知った Ralph は、Snawley を引き連れて甥の家に入り込む。Ralph の意図は Smike が Snawley の実の子である事を満座の前で証明することにある。Snawley の先妻が一人息子を隠していたとの彼女の臨終まぎわの告白について Ralph は言う。

“And this confession,” resumed Ralph, “is to the effect that his death was an invention of hers to wound you——was a part of a *system of annoyance*, in short, which you seem to have adopted towards each other . . . .” (italics mine) (p. 590)

Snawley の先妻は実の子の存在を否定することで夫に対して復讐を晴らしたというのが Ralph の主張である。しかし、実の子（つまり Smike）を通して他人の恨みを最も効果的に晴らそうとしたのは Snawley の先妻ではなく Ralph その人である。Smike を通して甥の Nicholas をやり込めるという Ralph の行動原則——“To wound him [Nicholas] through his own affections and fancies” (p. 440) のため、Smike を実の子と知らぬ Ralph はとんでもないしっぺ返しをくらうはめになる。後に Cheeryble 兄弟から Smike の素姓と死を聞かされた時、Ralph は自分の結婚こそ正に“a system of annoyance”であったという皮肉に気づかされる。Ralph の結婚も金が目あてであったが、先方の都合により極秘にされた。やがて子供が生まれて妻は結婚の公表を迫ったが、Ralph に拒否されたため子供は夫の知らぬ間に遠くに預けられ、妻は別の男と駆け落ちする (pp. 787–9)。皮肉なことに、結婚を“a system of annoyance”と罵り妻を苦しめた Ralph 本人が、甥の復讐に熱中する余り我が子を死に至らしめ、果ては自らも破滅に至ってしまう。かつて息子が寝起きしていた屋根裏部屋 (p. 805) で縊死することで、“a

system of annoyance”としての結婚を身をもって証明するという皮肉な結果となる。

Ralph の結婚が文字通り “a system of annoyance” である事は述べた通りだが、確かにこの小説には既婚の男女が結婚を “a system of annoyance” のみならず、“a system of wounding” としても用いている。この小説の夫婦の多くが結婚というテーマを提出しているとは Joseph Gold の言う通りである。<sup>14</sup> Walter Bray は数々の残虐行為で妻を悶死させ、その妻は結婚が金目当てであったと生前 Cheeryble 兄弟に告白している (p. 598)。Arthur Gride も結婚を通じて Bray 嬢を意のままに操る事を Peg Sliderskew に打ち明ける (p. 707)。しかも、物語のそもそもの発端が、妻が夫をそそのかしてやらせた投機の結果招いた家運の没落、夫の死にある事は非常に象徴的といえる。Myron Magnet によれば、本文を一貫する暴力的ラディカリズムが、性的な攻撃性となって一方を他方に従属させ、思いのまま繰り破滅に至らしめるという結婚の不合理な一面を描いているという。<sup>15</sup>

しかし今まで述べたのとは別に、結婚のこうした不合理な側面（性的な暴力性と余り関係なく）を、Dickens はユーモラスに描いてる点も見逃せない。このような結婚の多くは、相手方の道徳的欠如や人格の欠陥を表面的には弁護し、とり繕うように見せながら相手を操り、その欠点を無意識のうちに暴露してしまうというアイロニカルな機能をもっている。代表的なのは Mantalini 夫妻で、夫 Mantalini の妻への芝居がかった愛の告白が特に諷刺的に描かれている。Ralph が Kate を連れて来た時もそれが人目をはばからず演じられていた (p. 125)。夫の借金のため店が差し押えられ、妻に叱られた Mantalini が狂言自殺を図る場面でも、つまらない恋愛遊戯が演じられる (p. 261)。夫の借金・浮気などの試練に耐えることで、Madam Mantalini は嫉妬に狂う女の役を割り当てられるのであり、それがなければ彼女の存在価値はないといえる。一方夫は悲劇のヒーローの様に狂言自殺で妻を嚇し、自らの存在を誇示する。言うまでもなくこの結婚の心理構造の本質は、彼等自身



おのれの内面の空虚さから逃避しているため、その空虚さを外見上の華やかさ、しかし中味のない恋愛遊戯により人目をくらます点にある。同様の事は、Lillyvick や Wititterly にもあてはまる。怠惰な妻を貴族的だといってほめそやす Wititterly (pp. 267-8)。Mr. Lillyvick は年下の Miss Petowker を「神のようにすばらしい女性」(p. 321) と持ち上げ結婚したものの、最後は若い退役将校と駆け落ちされる(p. 690)。当然ここで諷刺されているのは、妻を讚美して止まぬつまらぬ夫連中であるが、同時に夫婦の年齢差の大きい結婚も疑問視されている。Madam Mantalini は結婚したばかりの夫より「かなり歳上」(p. 124) だし、Mr. Lillyvick と Miss Petowker も例外ではない。Madam Mantalini の店に来る客にも、「さほど大した家柄の出ではない若い娘と結婚する良家の年輩紳士」(p. 224) の例が出てくる。年齢の不釣り合いは、Kenwigs 夫妻では社会的身分の相違となる。妻の母親が Kenwigs との結婚は家名を汚すので反対した経緯が Lillyvick の口から語られる (p. 168)。

しかしこのような例にも拘らず、Dickens の結婚・家族観を否定的にとるのは早急であろう。なぜなら、たとえ“a system of annoyance”としての結婚が多く見られようとも、この様な結婚をまのあたりにして何をなすべきか、どのような家族共同体が理想かといった疑問こそこの物語を進める重要なファクターとなるからだ。Jerome Meckier は、Nicholas, Kate らの理想的な配偶者を求める行動を中心に物語が収録され、失われたエデンの回復に象徴される理想的な家族の<sup>コミュニティー</sup>共同体こそその遍歴譚の目指すものだと言う。<sup>16</sup>

Nicholas, Kate らの遍歴譚が社会的というより家庭的な欲求に基づいている事は、Nicholas の後半部分になると一層はっきりする。Snawley と Smike の偽りの親子対面があった45章で“a system of annoyance”としての結婚が提示された事で、Nicholas の話が結婚という主題に集中していく。その意味では49章の Mrs. Nickleby と Madman の恋愛遊戯は注目に値する。煙突を降りてくる隣家の Madman の侵入に動揺しながらも、再婚を断念する箇所である。少し長いが引用してみよう。

“Kate, my dear,” said Mrs. Nickleby . . . “you will have the goodness, my love, to explain precisely how this matter stands. I have given him no encouragement—none whatever—not the least in the world. He was very respectful, exceedingly respectful, when he declared, as you were a witness to; still at the same time, if I am to be persecuted in this way, if vegetable what’s-his-names and all kinds of garden-stuff are to strew my path out of doors, and gentlemen are to come choking up our chimneys at home, I really don’t know—upon my word—I do *not* know—what is become of me. . . . When I was not nearly so old as you, my dear, there was a young gentleman, who sat next us at church, who used, almost every Sunday, to cut my names in large letters in the front of his pew while the sermon was going on. . . . But that was nothing to this. This is a great deal worse, and a great deal more embarrassing. I would rather, Kate, my, dear, . . . I would rather, I declare, have been a pig-faced lady, than be exposed to such a life as this!” (pp. 645–646)

苦勞するより “a pig-faced lady” でいたいという彼女の決断は愉快だが決して諷刺されているわけではない。なぜなら、“a system of annoyance”としての結婚がこの小説の中心的な主題の一つと考えれば、Mrs. Nicklebyは氣遣いと結婚し、Ralphの様に身をもって“a system of annoyance”としての結婚を示さなければ物語の主旨と明らかに食い違うからだ。つまり、Northrop Fryeのいう“a romancer who keeps dreaming of impossible happy endings for her children”たることを止め、<sup>17</sup> 新たな認識を得たMrs. NicklebyによりKate, Nicholasの話も佳境に入る。そして次の50章では、Hawkrらの世界が崩壊し、Nicholasらの冒険を妨げる障害がなくなる。しかしこの冒険も、彼等の手本となるような家庭が不在のため——しいてあげれば

John Browdie 夫妻がいるが、彼等はあくまで地方的な存在にとどまる——問題となるのは Nicholas らが相手をめとるまでの過程であり、それ故エデン実現のために Frank Cheeryble, Madeline Bray の存在が必要なため彼等の性格描写が平板なものも首肯できる。それまでは“loving”と“fighting”が Nicholas を中心に繰り広げられ、G. K. Chesterton がロマンス風のプロットを見る所以がある。<sup>18</sup>

ところでエデン実現のため Nicholas を通して示されるのが「自然な」家族のあり方といえる。その際糸口となるのは“Nature”という言葉だが、これは Snawley が Smike の父親の名乗りをあげる時、歪曲して用いられる (p. 584)。後に Cheeryble 兄弟が Nicholas に親子関係における“Nature”を説明し、義務を放棄した親に愛情を持ち続けるのは単なるセンチメンタリズムにすぎぬとの発言をする (pp. 595-6)。だから家庭の中心として子供の存在がかなり比重を帯びてくる。Nicholas が父親の家を買い戻し牧歌的な家族世界を創る最終章と Kenwigs, Crummles 一家ら未だ他の家族に比べてまともな彼等が子だくさんで、子供中心なのはこの際注意すべきことといえる。

### III

Nicholas が45章あたりから結婚を中心とした家族の問題を軸に展開する事は既に述べた通りであるが、ここで関連してくるものに階級の問題がある。Frank Cheeryble の求愛を断った Kate を Nicholas が誉める場面 (ch. 61) がすぐ思い浮ぶ。しかし、この小説の場合結婚により階級・身分的体面を得るというよりは、中産階級の上流化による弊害や個人の社会的身分の喪失といった事実が Nicholas, Kate らに対していわば教育的役割を担っていると考えた方が納得がいく。そのせいか Nicholas 一家の世間知らずが何かと強調される。

This simple family, born and bred in retirement and wholly unac-

quainted with what is called the world—— a conventional phrase which, being interpreted, often signifieth all the rascals in it——mingled their tears together at the thought of their first separation . . . (p. 28)

しかもこの「世間」をさす the world には, “the fleshy”, “the devil” といった否定的ニュアンスがある。<sup>19</sup> 更に注意すべき事は, *Nicholas* の描く世界が, *Oliver Twist* 同様, 小さな世界の寄せ集めともいえるところにある。<sup>20</sup> Meckier は *Nicholas* が20回の分冊で刊行された事に注目し, それぞれの分冊に描かれている “rises” と “falls” の繰り返しが小説に緊張感をもたらしているという。<sup>21</sup>

The rises and falls in the book are usually those of the successive groups that Kate and Nicholas pass through, so that tension within an installment or in the novel as a whole is similarly generated.

Meckier 自身は, あのものものしい副題には特に触れていないが, ここで彼が指摘した “rises” と “falls” を具体的に副題にある様に “the Fortunes, Misfortunes, Uprisings, Downfallings” と考えれば, *Nicholas* らが体験する “the successive groups” がある程度教育的役割を持っている事に気づかされる。だからこの小説には *Nicholas* 一家をはじめ零落した身を嘆く場面が目につく (p. 347, p. 218) が, 代表的な例としてかつて由緒正しい紳士だった Newman Noggs があげられる (p. 10)。

こうした個人の没落がさらに大きな規模で表わされると, 「貧しき人々」と「富める人々」との執拗な対比となる。例えば *Kate* 救出のため急ぎよ London へ戻って来た *Nicholas* が, *Noggs* の下宿へ向う馬車から見た “crowded streets of London” は “sparkling jewellery, silks, . . . and most sumptuous articles of luxurious ornament” (p. 408) で目もくらむばかりだっ

た。"the goldsmith's treasures" などの贅沢品を並べる店と "pale and pinched-up faces", "hungry eyes" の並置がいやがうえにも wealth と poverty, repletion と starvation, life と death の対立を際立たせる (p. 409)。Kate が勤めた Madame Mantalini の店も、病弱で貧しい女達が贅沢品を作るパレードックスが指摘されている (p. 205)。また、Grice との結婚を思いとどまるよう Bray 嬢を説得しに行く途中、Nicholas は "the stately houses" に住む人が少なく、多くの人々が "noisome pens" に住む矛盾に思いを巡らす (p. 693)。最も象徴的なのは、Kate が招かれた Ralph 邸の屋内の様相である。

If she had been suprised at the apparition of the footman, she was perfectly absorbed in amazement at the richness and splendour of the furniture. The softest and most elegant carpets, the most exquisite pictures, the costliest mirrors; articles of richest ornament, quite dazzling from their beauty, and perplexing from the prodigality with which they were scattered around; encountered her on every side. The very staircase nearly down to the hall door, was crammed with beautiful and luxurious things, . . . . (p. 233)

お伽噺の一節を思わせる様な文章だが、"choicest", "costliest", "richest" といった最上級が貧しき者と富める者との対照を強調していることは言うまでもない。興味深いことに、このコントラストは Ralph の振舞いにも表われてくる。貧乏人には "harsh and loud . . . coarse and angry" である Ralph も金持には "all softness and cringing civility" といい具合である (p. 570)。

以上 wealth と poverty の対立を指摘したが、果たしてこの対立が Dickens の社会批評に晒されているかということと甚だ疑わしい。作者自身が、39、48年版のそれぞれの序文で何度も教育制度の非人道的な行為を槍玉に上げているのに比べ、London など都市部の貧富拡大にはあまり考慮していないかのように見える。ただ *Oliver Twist* では The New Poor Law (1834) との

関連で専ら人道主義的な社会批判がなされていたにすぎないが、ここでは社会のひずみがおぼろげながらも意識されている点、*Oliver* と比べて一步前進といえよう。貧者と富者のひずみが拡大する一方で、Nicholas 周辺の間人が世間体ゆえに貴族的害悪に染まる傾向も指摘されている。

その中心は何といても Sir Mulberry Hawk とその放蕩貴族の仲間である。Sir Mulberry と Lord Verisopht らの夜を明かしての乱痴気騒ぎは何度か言及されているが (ch. 26. 32), とりわけ圧巻なのは Hampton Court での賭博の場面 (ch. 50) で、Lord Verisopht との間におこった口論がもとで Sir Mulberry は Lord を決闘で死なせてしまう (p. 666)。Magnet によれば、彼等の度を越した貴族的放蕩は本書を一貫する “the problem of aggression” の一つであり、歴史的題材を求めれば “the Regency ideal of masculinity” に対する Dickens の反発だという。<sup>22</sup> Miss Petowker が Nicholas を「貴族的」といって誉める場面 (p. 184) から、暴力的な行状が貴族の代名詞の様に使われ、一般化していた事がわかる。しかしこのような暴力性だけに貴族的特質を限定するのはかえって問題の矮小化を招く。なぜなら中産階級に蔓延している上流社会の害悪は、必ずしも暴力的な側面とは限らないからだ。

Marcus は *Nicholas* を “a novel about the middle class” といい、登場人物の多くが “middle-class piety” と “prudence” の模倣にかまけていると言っているが、<sup>23</sup> 筆者はこれに上流階級特有の慇懃さ、気どり、見せかけなどを付け加えたい。Madame Mantalini の店では夫妻はいわずもがな、使用人の “the young ladies” まだが上流社会そこのけの気だての良さで (“with as much good-breeding as could have been displayed by the very best society in a crowded ball-room” (p. 209), Kate の身だしなみをひそひそと噂し合う。又、Miss Knag の兄は上流の生活を夢想し、世俗の話を少しでもされるならたちまち錯乱状態になるという (p. 223)。Lillyvick と Miss Petowker の突然の結婚のため娘 Moreleena の財産相続が不可能と知った時の Kenwigs らの騒ぎ振りは、まるで貴族の相続争いを思わせる (p. 465)。

Miss Squeers も気まぐれ、ものぐさの点では貴婦人の資格充分で、彼女とメイド Phib の髪を結いながらのお喋りは、上流貴婦人の生活のパロディともいえる (p. 134)。しかし何ととっても最悪の例は Mrs. Witterly である。怠惰な性癖ゆえに日がなソファーに横たわり、青い白い顔をした「甘い気の抜けたような雰囲気」を持った婦人である (p. 265)。

その Mrs. Witterly が Kate に当時流行の「上流社交界小説」(“Silver-Fork Novel”) を読ます箇所 (pp. 358-9) は、Miss Knag の兄と同じく (p. 223)、貴族的な生活がいかに彼等の中で根強く崇拝されていたかを示す好個の例といえる。ここで掲げられている “The Lady Flabella” (1828) は、‘Silver-Fork School’ の一人 Catherine Gore 夫人 (1794-1861) によるもので、今日では Thackeray が *Novels by Eminent Hands* (1847) でしつこく諷刺したことで、かろうじてその名をとどめているにすぎない。Dickens がこのような作品に対して、Thackeray 程でないにせよ否定的であった事は断るまでもない。1841年の Gore 夫人宛ての手紙の中で、Dickens は *Bentley’s Miscellany* (Feb, 41) に収められた彼女の作品 “The Children of the Mobility versus the Children of the Nobility, Albany Poyntz” を “the gall and bitterness of my life” と述べ、Gore 夫人の諷刺を “to pluck the peacock’s feathers from such daws” とアイロニカルに賞讃している。<sup>24</sup>

Dickens が Gore 夫人の作品に代表されるような貴族的放埒に対し一線を画してゐる事は、主人公 Nicholas を通して既に述べられている。

And here it may be observed, that Nicholas was not, in the ordinary sense of the word, a young man of high spirit. He would resent an affront to himself, or interpose to redress a wrong offered to another, as boldly and freely as any knight that ever set lance in rest; but he lacked that peculiar excess of coolness and great-minded selfishness, which invariably distinguished gentlemen of high spirit. In truth, for

our own part, we are disposed to look upon such gentlemen as being rather incumbrances than otherwise in rising families: happening to be acquainted with several whose spirit prevents their settling down to any grovelling occupation, and only displays itself in a tendency to cultivate mustachios, and look fierce; and although mustachios and ferocity are both very pretty things in their way, and very much to be commended, we confess to a desire to see them bred at the owner's proper cost, rather than at the expense of low-spirited people. (p. 202)

引用からもわかる様に、Nicholas が当時の貴族的特質とは程遠かったことは言うまでもない。Nicholas の主張する階級意識が必ずしもスノビッシュなものではなく、寧ろ自己防衛的なのは、この小説に使われている“the world”のもつ否定的なニュアンスを考えればよい。しかし自己防衛的と形容される Nicholas の階級意識が、<sup>25</sup> 必ずしも消極的な意味ではなく、中産階級であることの誇らしげな主張であることは、Nicholas の国会議員 Gregsby に対する態度を見れば充分理解できる (pp. 196-7)。

#### IV

以上この小説が、前半部分のとりとめもない Nicholas, Smike らの遍歴譚から結婚、理想的な家族共同体を求めての Nicholas, Kate の物語を中心に後半部分、特に45章以降展開している事を述べた。Nicholas の行動の展開そのものが、後の David, Pip ら当世風紳士の先駆けを示唆するものとも考えられるが、ここではひとまず主人公の眼に映った家族がどれだけ世の有為転変をこうむっているかと考えた方が、この小説の全体のテーマをある程度明らかにできる。しかしここで注意しなければならないのは、冒頭にあげたテーマ、家族・階級がこの小説では後期の小説ほど効果的に強調されていないことだ。



この原因については、*Bleak House* の the fog, the Court of Chancery, *Little Dorrit* の the prison, *Our Mutual Friend* の the river, the dust heaps など物語の全体を統べる symbolism の不在があげられる。更に、*Dombey and Son* に見られる階級と結婚につきものの金についての考察が、この段階の Dickens では未だ不十分だった事が考えられる。寧ろこの *Nicholas* では階級と結婚のための社会的属性の金というより、第2章の the United Metropolitan improved Hot Muffin and Crumpet Baking and Punctual Delivery Company に見られる喜劇的素材といった感じが強く、Dickens 自身金の重要性は認識していたものの、未だ不徹底だったといえる。<sup>26</sup> 具体的には *Martin Chuzzlewit* で Old Martin がさかんに説いている様に金の持つ普遍的な害悪より、所有者の人格により金の良し悪しが決められている事だ（例えば Cheeryble 兄弟の金は良く、Ralph のは悪いといった具合に）。それ故、家族・階級についての社会的次元での考察がなされておらず、読者をひきつける力が弱いといえる。

読者を余りひきつけないという点では、階級を代表する the Mantalini, the Wititterly, the Kenwigs らが物語の本筋とは余り関係なく、周辺部に位置するからといえる。しかも、描かれている家族がそれぞれ別個に存在しているため、Dickens があれほど諷刺した中産階級の世界が今一つ強烈な印象を与えない。こうしてみる限り、この時点での Dickens の作家としての手腕の力不足は否めない。しかし、この作品に演劇的な側面とは別に Dickens が結婚（“a system of annoyance” としての結婚）を中心とした家族・階級の問題を扱った意義を見たのは既に述べた通りである。Dickens が結婚・階級という問題に少なからず引きつけられていた事は確かで、その意味では *Nicholas* はたとえ構成は断片的であろうとも、後の Dickens の作品の粗型をなすものといえよう。それ故、G. K. Chesterton がこれを“Dickens' first romantic novel” と好意的に評価し、*Nicholas* に着手することで Dickens は偉大な作家になる決意をしたのだという言葉にはかなりの説得力を感じるの

である。<sup>27</sup>

注

テキストには *The New Oxford Illustrated Dickens* (London, 1948–1958) を使用した。Nicholas Nickleby からの引用は本文中に出所を示した。

- 1 Steven Marcuss, *Dickens: from Pickwick to Dombey* (London: Chatto & Windus, 1965), p. 92.
- 2 George Gissing, *Critical Studies of the Works of Charles Dickens* (New York: Haskell House, 1965), pp. 58–61.
- 3 Bernard Bergonzi, "Nicholas Nickleby," in *Dickens and the Twentieth Century*, ed. John Gross and Gabriel Pearson (London: Routledge and Kegan Paul, 1962), p. 65.
- 4 Bergonzi, pp. 69–70.
- 5 Michael Slater, "Introduction to *Nicholas Nickleby*" (Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1981), pp. 14–5.
- 6 Sylvere Monod, *Dickens the Novelist* (Univ. of Oklahoma, 1968), p. 151.
- 7 藤森美子 『『ニコラス・ニッケルビー』—演技する者たち—』イギリス小説パンフレット3 (1972) p. 36
- 8 John Forster, *The Life of Charles Dickens* (London: Oxford Univ. Press, no year), p. 112.
- 9 Monod, p. 140.
- 10 John K. Saunders, "The Case of Mrs. Nickleby: Humor and Negligent Parenthood," *Dickens Studies Newsletter*, Vol. 10. (1979), pp. 56–8.
- 11 Bergonzi, p. 74.
- 12 Michael Slater, *Dickens and Women* (London: Dent & Son, 1986), p. 224. "Mrs. Nickleby is revealed as a huge anti-woman joke on Dickens's part, originating, as we have seen, in feeling of hostility towards his unforgiven mother".
- 13 これは、18世紀や19世紀前半の小説では大きな問題として提示されていない事も知らねばならない。子に頼る親を扱った作品としては Hardy の *Tess* (1891) がすぐに思いつが、Dickens の同時代では Charlotte Brontë の *The Professor* (1857) の François Pelet の母親と Zoraïde Reuter 嬢の会記 (ch. 17) で、当時の子供達が置かれている状況を少なからず暗示している。
- 14 Joseph Gold, *Charles Dickens: Radical Moralizer* (Univ. of Minnesota, 1972), p.72.
- 15 Myron Magnet, *Dickens and the Social Order* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1985), pp. 12–14.

- 16 Jerome Meckier, "The Faint Image of Eden: the Many Worlds of *Nicholas Nickleby*," in *Dickens Studies Annual*, ed. R. B. Partlow (Cambridge: Southern Illinois University Press, 1970), pp. 130–131.
- 17 Northrop Frye, "Dickens and the Comedy of Humors," in *The Victorian Novel: Modern Essays in Criticism*, ed. Ian Watt (London: Oxford University Press, 1971), p. 69.
- 18 Gilbert Keith Chesterton, *Appreciations and Criticisms of the Works of Charles Dickens* (New York: Kennikat Press, 1966), pp. 26–29.
- 19 Meckier, p. 142.
- 20 Marcus, p. 111.
- 21 Meckier, p. 131.
- 22 Magnet, p. 34.
- 23 Marcus, pp. 100–101.
- 24 *The Letters of Charles Dickens*, ed. M. House and G. Storey (Oxford: The Clarendon Press, 1969), Vol. 2, pp. 200–201.
- 25 Marcus, p. 121.
- 26 Grahame Smith, *Dickens, Money, And Society* (Los Angeles: Univ. of California, 1968), p. 41. また Grahame Smith は同書の中で、*Nicholas* の構造の中核となる問題に Dotheboys Hall, Crummles and the theater, London and the life of the steets の3点を掲げている (p. 188).
- 27 G. K. Chesterton, pp. 69–70.